

## 山形県における少年非行

—農村の社会変動と少年非行—

兼 頭 吉 市

### 山形県概観

山形県は、芭蕉の『奥の細道』の主たる舞台となった文字通り、みちのくの中心部、しかも奥羽山脈によって隔てられたいわゆる裏日本に位置している。

東西九七軒、南北一五三軒、総面積九、三二六・一三平方軒、全国道府県中八番目の広さを持っている。しかしその広い土地の七割は、蔵王連峯や吾妻連峯を擁する奥羽山脈、鳥海山や月山を含む出羽山地、朝日連峯や飯豊連峯を抱える越後山脈など二、〇〇〇米前後の火山が聳える山地で占められている。

山形県は大きくは米沢市を中心とする置賜盆地と山形市を中心とする村山盆地を含む内陸地方と日本の穀倉地帯といわれる酒田、鶴岡市を中心に広がる在内地方に別れ、内陸は当然盆地的気候で多雪、豪雪地帯であるのに対して、庄内地方は日本海に面し、多雨、多湿、冬の季節風が吹き寄せる砂嵐は余りにも有名である。山形県の昭和五二年末における人口は総勢約一二三万人、全国四七都道府県中第三位を占めている。人口密度は一平方軒当り、一三二・三人で同じく全国第四二位に当たっている。

昭和四八年に至るまでは社会減、すなわち一五歳から

(35) 山形県における少年非行

一九歳までの弱年層を中心とする東京、神奈川、埼玉、千葉等への転出による人口の減少が自然増を上廻り、人口は毎年減少の一途を辿って来た。昭和四八年秋オイルショックを契機とする経済不況やふるさと再開運動等の影響のもとに昭和四九年以降、転出超過が逆転し、僅かながら人口の増加が続いて今日に至っている。

人口が減少し続けているときでも世帯数は一貫して増加し昭和五二年、山形県における世帯数は三一、〇一六に達した。そのうち単身世帯が八・八パーセント、核家族が四八・三パーセントを占め、残り四三・九パーセント近くはいわゆる複合家族である。山形県においても急速な核家族化が指摘されて来たが、それでも昭和五二年、全国の核家族率六二・二パーセントに比べると遙かに低い。したがって昭和五二年、全国の一世帯当り人口三・二九人、同東京都二・六六人に對し山形県の場合は一世代当り人口三・九七人を数え日本一の大家族となっている。このうち六五歳以上の老人を含む世帯は全体の三二・七パーセントに及びこれまた全国のトップの座を占めている。

山形といえは桜桃や葡萄、庄内米など農業県で通って

いるが、ここでも急激な産業化が進行している。昭和三五年、いわゆる高度経済成長政策がとられた当初、山形県における専業農家は四六、七三六戸に及んでいたが、昭和四九年にはその七分の一に近い六、八八九戸に激減した。その後僅かに増え昭和五二年では七、八九七戸に至っている。と、ともに兼業農家、中でも兼業による所得が農業所得を上廻るいわゆる第二種兼業農家が急速に増昇、昭和五二年では農業所得が兼業収入よりも多いいわゆる第一種兼業農家四四、三二七戸を遙かに追い越し遂に五二、二一七戸を数えるに至った。つまり昭和五二年、山形県の農家総数一〇四、四四一戸のうち、専業農家は僅かに七・六パーセント、第一種兼業農家が四二・四パーセントで第二種兼業農家が実に半数を占めているのである。

さらに産業三部門別就業人口の割合で見ると、全国では第一次産業一四、(東京都一) 第二次産業三四(東京都三四) 第三次産業五二(東京都六五)に對し、山形県の場合は、三〇対二八対四二となっていて、この面ではなお農業県山形の面目を保っている。

同じくこれを産業別純生産所得によって対比して見る

と、山形県での第一次産業による所得は一、九九二億円、第二次産業による所得三、三八〇億円、第三次産業による所得一二、二五〇億円となっている。その割合は一六・三対二七・六対五六・一である。全国と同割合は五・四対三五・七対五八・九、東京都では〇・四対三一・七対六七・九であり、山形県の産業化はまだまだ立ち遅れているということが指摘できよう。

#### 山形県民の生活

山形県民の一人当り年間所得は一、〇七四、〇〇〇円で、東京都の一、九八一、〇〇〇円を一〇〇とすると山形県の指数は五四・二パーセントで全国第五位に該当する。他方、雇用労働者の平均賃金で見ると、東京都が二三〇、九九三円、全国平均が一九四、二〇七円であるのに対し、山形県の場合は一四四、八〇三円で全国最低となっている。これらはメリヤス加工等の下請け零細企業に働くほとんど内職に近い婦人の低賃金が大きく影響しているものと思われる。また先にも触れた兼業農家の増加にも見られるように機械や化学肥料の購入あるいは家庭の電化など生活現代化に必要な諸経費を補なうため

に、他方、機械化、合理化によって生じた余剰の労働力を兼業に振り向けているのである。つまり山形県雇用労働者の平均賃金が低いということは直ちに山形県民の生活水準も低いということを意味するものではない。たとえば山形県民の持ち家率は八〇・七パーセントにも及び東京の三八・三パーセント、全国の五八・一パーセントに比べて極めて高率である。世帯当りの部屋数も東京で三・一五、全国平均が四・二七に対し山形県は五・二三、同じく畳数では東京一七・八、全国平均二五・〇に対し山形県は三四・三となっている。

さらに朝日新聞社編「民力」一九七八年版による生活現代化率（これは私的消費における高密度化の度を指すもので、①経済的側面としての財の消費の都市化 ②文化的側面として、特に大衆的情報媒体における情報化 ③行動におけるモビリティ化、特にモーターゼーションの普及度 ④選択における多様化としてのファッションの四つの側面から測定している）によると、全国の平均を一〇〇とした場合、総合では山形県は九七・六、宮城県の九八・二に次いで東北第二位の座を保っている。電気冷蔵庫、電気洗濯機、電気掃除機、電気炊飯器ある

(37) 山形県における少年非行

いはガス炊飯器等生活財の普及率では一〇〇・四で東京都の九八・七よりも高い。ステレオ、ピアノ・テープレコーダー、トランジスタラジオ、カメラ等レジャー財の普及率では山形県は九四・八で宮城県の九五・六に次ぎ同じく東北では二番目である。書籍、雑誌、新聞やテレビの普及率、これを情報化率と呼んでいるが、山形県のこれは八二・〇で東北でも最も低い。大学、高校への志願者数、その他教育費などの教育化率では東京一一八・四に対し山形県は八八・四であるが、東北では宮城県の一〇〇・九に次いで二番目に高い。人口当たり乗用車の保有台数や乗用車一台当たりガソリンスタンドの数などをモビリティ化率としているが、山形県は一〇四・二で東京の八八・七、宮城県の九九・三をも遙かに凌駕している。

次に、ステレオ保有率や人口当たり女性雑誌配布率、ゴルフセットやレディスショップの数などによるファッション化率では山形県は全国平均の半分にも達しない四八・〇で、東京の二五七・一の五分の一、宮城県の九二・五に比べても約二分の一といった低率である。このように山形県民のファッション化率が低いということは、農

業県であり、むしろ県民性における地味さ、質素さ、謙虚さをさえ示しているといえよう。

以上に概観して来たように、みちのくの農業県山形にも産業化、都市（生活）化の波が早いテンポで滲透して来ていることが窺われる。そしてこれらが山形県民の家庭生活、家族の機能に大きく影響し、県民の生活様式や生活意識に急激な変動をもたらしているのである。

高度成長政策による資本主義経済の農村社会への浸襲は農家の生活と意識に大きな変化をもたらした。農家戸数、就農人口の減少、中でも専業農家がかつての僅か一六・九パーセントにまで激減したのは、農業経営の近代化とか農業の構造改善の名の下に生産性の低い小規模農家が切り捨てられて来た結果である。さらに農畜産物の輸入自由化という国際的な重圧に対する抵抗力を持つために基盤整備が強行され益々小規模経営の農家は淘汰されていく。農作業の機械化、合理化に伴う経費の増加、テレビ、電話、自動車の普及による都市的文化の滲透に掻き立てられた消費欲求の増大、これらをまかなうための現金収入を求めて兼業、共働き、出稼ぎあるいはより高い所得を求めて脱農、離村し都会に流出して行く者を

生む。

このような産業化、都市化などの社会変動が最も集約的に現われるのは家庭である。特に大都市、大企業に向けて若年労働力を供給し続けて来た東北農村では息子や娘に残された老人核家族化が進行し、長期通年化している出稼ぎにとり残された母子世帯が増えて来ている。

東北の山深い農家にもラジオやテレビ、電話、新聞、雑誌、自動車普及し、商業主義によって操作された誇大な宣伝が消費欲求を刺激し、低い農業所得をカバーするために母親をさえ低賃金の下請零細企業に駆り出している。

村と家庭における協同生活の破壊は、人々の個人化、外部化、異質化(多元化)をもたらして家族間の接触を間接化、部分化、皮相化し、相互の共通理解を妨げ、連帯感や帰属意識の喪失、低下を来たし、親子、同胞の相互無関心、無関係化などの種々の病理現象を露呈するに至っている。

#### 山形の少年非行の傾向

先に述べて来たような山形県及び山形県民の生活実態

を背景にして初めて山形県の少年非行の傾向を正しく把握することができよう。全国の少年非行の趨勢は昭和四七年を底に、以来上昇カーブを続け、少年非行における第三波の到来といわれているのに対し、山形の場合は全国のそれに三年遅れて、昭和五〇年を底に、以後五一年、五二年と急なカーブを描いて増加して来ている。特に昭和五三年は小学生や中学低学年の触法少年による窃盗を主体に対前年比一六・二パーセントの増加を見ている。

年齢別に見た山形県の少年非行の特徴は刑法犯少年一、五五五人のうち、一四歳未満の触法少年が三一・五パーセントも占めている点である。昭和五二年度東京の場合触法少年は全体の一九・六パーセントであったのに比べるとそれが一層明らかとなろう。次に犯罪少年の中で最も多い年齢層は一六歳の一九・五パーセント、次が一五歳で一三・四パーセントとなっており、一八歳と一九歳のいわゆる年長少年は両方あわせても一四パーセントにしか達していない。これに比べ東京の場合は最も多数を占める年齢層は一五歳で一七・二パーセント、次が一六歳の一五・五パーセント、年長少年は二一・六パーセントにも及んでおりこれらから見ても山形県の場合、非行

(39) 山形県における少年非行

の低年齢化傾向が顕著に窺える。

次いで罪種別に見ると窃盗犯が全体の八一・五パーセント（昭和五二年度では八三・九パーセント、同じく東京六三パーセント、全国五五パーセント）で、いうまでもなく刑法犯の中で首位を占めている。特に山形県の場合の窃盗の占める割合が高いのは先に指摘した触法少年など年少者の占める比率が高いことと関連しているものと思われる。

次いで多いのは暴行、傷害、恐喝などの粗暴犯で九・六パーセント（昭和五二年度六・八パーセント、同じく東京二二・八パーセント）となっている。東京に比べて山形県の粗暴犯が少ないのは先の年齢傾向との関連に因るところが大きい。なぜならば暴行、傷害、恐喝等粗暴犯を働くには一定の腕力、体力の発達を必要としており、その意味で粗暴犯は中間、年長少年の非行だといえるのである。また粗暴犯はこれまで農村部には少なく都市部に多発していると指摘されて来た。たしかに日常の行動圏が狭く相互に顔見知りで、名前も知り合っている仲では粗暴犯、ことに集団によるそれらが発生する余地は少ない。

詐欺、横領などの知能犯は僅かに〇・四パーセント（昭和五二年度一・一パーセント、同じく東京八・三パーセント）と少ない。東京における知能犯率が高いのは乗り棄てられた所有者不明の自転車に対する占有離脱物横領が多数含まれているからである。

強姦、わいせつなど性風俗犯も同様、〇・四パーセント（昭和五二年度〇・六パーセント、同じく東京〇・六パーセント）と極めて少ない。

殺人、強盗、放火などの凶悪犯はさらに少なく、〇・三パーセント（昭和五二年度〇・二パーセント、同じく東京一・四パーセント）と極めて低率である。東京と比べて山形県の場合凶悪犯が少ないのは単に少年非行だけの傾向ではなく成人においても同様の傾向を示している。その原因の一つとして、山形県民の温厚で控え目な県民性を挙げることができよう。かつて、科学警察研究所の研究による都道府県別犯罪の一件当たり悪質度的に見ても山形県は島根県について全国で最下位であった。

なお、山形県の少年非行の中で少ないものの代表的なものとは学校内暴力を始めとする集団暴力事件、暴走族の組織間抗争事件、管理売春など暴力組織などと結びつい

た性風俗事件、最近に至って漸増の兆しが見えられるものの東京その他の大都市部に比べてまだまだ少ないのはシンナー、ボンドなど薬物乱用事件である。しかもやぐざ暴力団と結びついた事犯、たとえば、覚醒剤等の薬物を暴力団組織が資金源として高い値段で売り捌いたり、少年にそれらの使用を強要したりした事例はほとんど発見されていない。

#### 山形県における少年窃盗の実態

山形県の少年による刑法犯の八割強を占める窃盗の実態をさらに分析して見よう。

まずその手口を犯罪少年に限って見ると、あき巢や学校荒し、金庫破り、忍び込みなどのいわゆる侵入盗は一〇・三パーセント(昭和五二年度一〇・五パーセント、同じく東京一〇・五パーセント)で、万引、自転車盗、自動車盗、車上狙いなどの非侵入盗が残りの八九・七パーセント(昭和五二年度八九・五パーセント、同じく東京八九・五パーセント)で、この二つの区分では東京との間に差異は発見されない。

しかし、さらに詳細に検討すると東京との間にかなり

大きな違いを指摘することができる。山形における少年の窃盗事件のうち、最も多いのは万引によるものでこれが四五・一パーセント(東京では四三・六パーセント)で、次が自転車盗の九・二パーセント(東京二三・二パーセント)となっている。万引率においては東京との間に差はないのに、二位の自転車盗率において、東京に比べ山形県は極端に少ない。

三番目に多い窃盗手口は山形県では自動車盗の八・八パーセント(東京二・九パーセント)であるのに対し、東京ではオートバイ盗の八・八パーセントとなっている。山形県でのオートバイ盗は、店舗荒しと同じく六・六パーセント(東京〇・八パーセント)である。窃盗手口から見た山形県の少年非行の特徴を要約すると、東京に比べて自転車盗が極端に少ないのに対し、自動車盗、店舗荒しが著しく多いという点が指摘できる。特に山形県における少年の自動車盗は昭和五二年度には三二件であったものが昭和五三年度は倍増し七五件となっている。しかも自動車盗は量的増加のみならず内容的にも山形県の特徴を典型的に示しているのでこれについてはさらに後で詳細に触れることにしたい。

(41) 山形県における少年非行

これら山形県における少年犯罪の原因として同県警本部が挙げている統計資料によると、家庭的な問題としては「両親の関心の欠如」というものが最も多く五〇・六パーセントを占め、次いで共稼ぎや出稼ぎ家庭のための「親の放任」で、八・三パーセントを占め、「父親または母親の欠損」によるものが三番目に多く六パーセントとなっている。

社会的な問題としては、「友人に誘われた」とするものが二五・六パーセントで最も多く、次いで「商品の陳列又は販売方法に問題があった」が一八・四パーセントでこれに続き、「車などがとりやすい状態にあった」が三番目に多く一〇・六パーセント、「学校内における非行行為の影響」が七・八パーセントと続いている。

少年自体の問題としては、「物を見て急に欲しくなった」とするものが二〇・五パーセントで最も多く、次いで「好奇心あるいはスリルを求めて」というものが一七・八パーセント、「日頃から欲しいと思っていた」が一三・五パーセント、「遊興費欲しさ」が七・六パーセントの順で続いている。

このような原因類型のため方自体必ずしも科学的であ

るとはいえない。特に少年自体の問題として列挙されている範疇はそれを囲む家庭や学校、職場あるいは地域社会における多様な問題と不可分かつ力動的に関連し合っている極めて個別的なものであって、このように単純化できるものではないであろう。ここでは非行を犯した少年たちがおかれている家庭環境の特徴を明らかにしておきたい。

少年の家庭環境

山形県警察本部の調査によると、山形県の非行少年の家庭のうち、「共稼ぎ家庭」が三一・四パーセント、「欠損家庭」が九パーセント、「出稼ぎ家庭」が三・六パーセントとなっておりこれらを合わせると四五パーセントにも達している。かつて農家は生産と消費が同じ場で営まれ夫婦、親子、同胞が同じ労働の下に、相互協力、相互依存の生活を通して家族間に強い一体感が助長され、それらが特に子供の非行化に対する強い抑止力として作用して来た。ところが先にも触れた通り、昭和三〇年代後半、高度成長政策の波に乗って農村にも資本主義経済が押し寄せ、急速な産業化、都市化の下に伝統的、保守



的ならぬ農家の生活を一変させた。

都市的消費生活を維持するため、さらに高い所得を求めて兼業化、共働き、出稼ぎ、そして働き手の離農、離村を促がした。

山形県の山村では、父や夫や息子たちは東京方面に出稼ぎに、母や妻、娘は地場のニット(メリヤス)工場や罐詰(果実)工場、電機部品工場等に働きに、子供たちは学校に出て、家にはひっそりと老人が電気炬燵の中でテレビに見入り、日中の町(通り)はゴーストタウンと化するといわれる。

男たちの出稼ぎをなくし、あるいは離農、離村を防ぐために誘致された下請け企業ではあったが、賃金その他の労働条件は必ずしも高くなり却って、これまでは男たちが働きに出た後、留守を守り、老人と子供の世話に当たって来た婦人たちをこれに駆り出し、低賃金の下に長時間の労働に従事させる結果となった。それらが子供たちの家庭を下校時不在家庭(鍵っ子)にし、年寄り(じいちゃん、ばあちゃん)家庭、放任家庭、無関心家庭、過保護家庭に変貌させるに至った。

出稼ぎ家庭は最も深刻である。出稼ぎが提起する問題

は出稼ぎ者本人と残留家族及び地域社会のそれぞれに分けて考えることができる。山形県企画調整部がまとめたところによると、先ず家郷を遠く離れて労働に従事する出稼ぎ者が当面する問題としては、

- ① 妻子と長期間の別居を余儀なくされる。
- ② 日雇いなど不安定な労働条件の悪い職場が多い。
- ③ 土木建設など危険な仕事が多い。
- ④ 賃金のほとんどは家計に廻さなければならない。
- ⑤ 刺激的な都会の消費生活からの誘惑がある。

他方、世帯主あるいは他の一家の働き手が出稼ぎに出たあとに残された家族が当面する問題としては、

- ① 父や兄、時には母と長期間、別れて暮さなければならぬ。
- ② 働き手が留守の間、老人や婦人あるいは子供が生産や生活の維持に当たらなければならない。
- ③ 父や母が不在のため親子の対話が持てない(心配ごとが起こっても相談できない)
- ④ 雪おろし、道つけなどの力仕事をやってくれる者がいない。
- ⑤ 農協や役場、学校からの調査に対する回答や書きもの

ができない。

⑥ 手軽な化学肥料や農薬、機械等を使用し農業生産費が高つく。

⑦ 農林業の粗放化、地力、再生産力の低下をきたす。

最後に老人や婦人、子供だけが残された地域社会の問題としては、

① 火災、その他の災害に対する防災能力が低下する。

② 道路の修理等公共の仕事に出役するものがない。

③ 冠婚葬祭など近処づき合いができない。

④ 地域の慣行がすたれ連帯感が稀薄になる……などが挙げられている。

出稼ぎが地域社会に与える影響は大きく、それまでむらの生活を支えて来た諸種の生産的慣行を破壊し、公共施設の維持費、負担費の単価を急増させ、地域社会の財政負担を増大させる。それらが公共施設におけるサービスの低下や義務教育施設の統廃合、複式学級の増加、消防、保健衛生施設の不足を顕在化させる。中でも、灌漑や道路の維持、補修、共有林や採草地などの手入れが出來ず、災害や疾病に対応する能力が低下し住民の生活基盤が崩壊し、それらがやがて拳家離村をもたらした過疎化

現象を呈するに至る。

出稼ぎが及ぼす影響は、息子や嫁であり、父母や兄、姉、あるいは夫でもある働き手のいない家で、長い冬期間、深い雪と闘いながらむらや家を守らなければならぬ老人、子供、婦人に対して最も厳しい。中でも両親のあたたかい庇護を得て、ようやく成長し社会化を遂げることが可能な子供にとって両親の長期間の不在は余りにも苛酷である。

それらの第一の問題は父や母との長期にわたる別居がもたらす情緒的疎隔である。さみしさや孤独感、不安感や焦燥感が子供たちの小さい胸を締めつけている。これらが子供の性格形成に大きく影響を与えるのは当然であろう。

次に父母の不在による躰や教育上の問題がある。いうまでもなく子供は家庭で、父や母、兄、姉たちの起居動作に接し、それへの同一化を通して社会性、中でも規範意識や超自我(良心)を形成して行くものである。父母の不在が子供たちの情緒を不安定にし躰や教育による積極的な社会化を阻害する。一年の半分を留守にしていた父母は残りの半年を甘やかし、過保護となり、あるいは

は反対に過干渉に陥り、子供の自主自立化を妨げかねない。父母に代って監護する祖父母は一層過保護又は過干渉となり、子供をして耐性の弱い神経症の人格に育てる可能性がある。住々父母と別居していることへの不憫と同情から無闇と物を買ひ与える傾向が見られる。このような物(金銭)と精神(愛情)の過不及が子供たちの人格構造を不安定なものとし、依存的態度を助長して自主性を損ない誘惑その他の危機的場面に對する耐性や抵抗力を弱化させたとしても決して不思議ではない。

山形県の非行少年の家庭のうち、四五パーセントにも及ぶものが、共稼ぎ家庭や欠損家庭や出稼ぎ家庭であり、家庭的非行原因のうち六五パーセントまでもが、両親の関心の欠如や放任、欠損によるものとされている。

これらの中には父が出稼ぎ中、事故で死傷した家庭もあれば、父母が出稼ぎに出て家庭には年老いた祖父母しかないない、中にはその祖父母さえもおらず、少年が幼ない弟妹の世話をしている家庭もある。

不況のあおりを受けて子供達が待ち侘びる土産物も十分に買えずに帰省しなければならなかった出稼ぎ者も居る。さらに農畜産物や果実の輸入自由化攻勢や基盤整備

という名の小規模農家の切り棄て、苛酷な減反政策に揺れ動く農村の少年たちは、父祖が生きて来た職業や伝統的な価値規範に同一化できず、他方、テレビその他のマスコミを通して滔々と押し寄せる都市的消費文化に眩惑され、非行化への危険に無防禦のまま曝されているのである。

#### ある集団自動車盗の事例から

最後に山形県の少年非行の一つの典型として、山形県K町に発生した中学生による集団自動車窃盗の事例を紹介しておこう。

この事件は昭和五二年十一月から昭和五三年四月に至る間、七名の中学生(うち一名は触法)が居住地域にキーをつけたまま駐車してあった普通乗用車、大型ダンプカー等三六台を窃取し、主として土曜日の午後十一時過ぎから翌、日曜日の午前三時頃までの間、無免許でこれを取り回したものである。

この事件を最近の山形県における少年非行の一つの典型としてとり上げた理由は、先にも触れたように、東京の少年非行に比べて、山形県では自動車盗の発生率が極

(45) 山形県における少年非行

めて高いこと。しかもそれが、同じく山形県の少年非行の一つの特徴でもある中学在学中の触法、年少少年による行為であること。さらに山形県における自動車の普及率は極めて高く、少年の家庭も大半は自動車を保有しており、少年たちの多くは早い者では小学校五、六年生の頃から両親や兄らの自動車運転に接してそれに深い関心を寄せ、自動車に対する広い知識を持ち見よう見まねで運転操作の技法を会得していること。家庭の保護者も子供の車いじりに寛容で、時にはわが子が小学生あるいは中学生でダンプを運転できることを自慢に思う親さえもいること。そして他の公共交通機関の少ない、しかも地域が広範囲に及んでいる農山村にとって自動車（マイカー）は欠くことのできない生活必需品であり、車種や型式などはその家庭のあるいはその自動車の保有者の所得や好み、車両の使用目的等によりそれぞれ相違はあるにしても、大方の家庭は自動車を保有し、エンジンキーをさしこんだまま、敷地内の既成の小舎か若しくは仮設の簡易ガレージの中に、時としては広い庭先の青空の下に無雑作に駐車してあるのが普通であること。そして夜間の交通、特に地域住民の通行は少なく、舗装され、緩や

かな勾配とカーブを持って隣りのA県に通ずる国道は格好のドライブコースになり、他人の自動車を簡単に持ち出し、無免許で経験未熟の少年でも容易にそれを乗り廻すことができ、スピード違反その他無謀操縦をしても、それが発覚する危険は少なかったこと。自動車は日頃、刺激の少ない農山村の少年たちにとって、家庭や学校で蓄積した自己不全感を、それを暴走させることによって補償してくれる玩具であり、冬はヒーター、夏はクーラーがとりつけられ、まさに暖冷房完備の個室であり、カーラジオ、あるいはカーステレオから流れるロックをバックに気の合った友達と話し合うことにより相互に帰属感を確かめ合うサロンでもあること。これらにも増して、この集団自動車窃盗事件には、それを犯した中学生やそれをとりまく家庭（家族）学校（友人、教師）地域社会（被害者を含め）に、先に指摘して来た農村社会における産業化、都市化などの社会変動が色濃く影を落しているのを見ることができからである。

本件非行が発生したK町は最上盆地の北部、A県に隣接し、古くから杉の美林で著名な農村である。面積一六一・五四平方軒、人口は七、九五九人で昭和五〇年来ほ

とんど増減がない。全世帯数一、七二六のうち、農家世帯は一、〇六三で全体の六二パーセントを占めている。

但し、専業農家は僅かに三二世帯にしか過ぎず、農家の九七パーセントまでは兼業農家でしかも農業所得よりも農外所得の方が多い第二種兼業農家が多く、これが全農家の五二・二パーセントを占めている。他に町の名を冠した良質の杉や肉牛を産出し、住民の生活水準は県内でも高い方に属している。一〇〇年前、英国人イサベラ・バード女史がこの土地を訪れ、美しい自然と純朴な村民の人情に接して感動した模様を詳しくその著「日本僻地紀行」に残しているが、今なお僅かではあるが杉皮葺きの古い家が見かけられ、住民の人情は一般に厚く親切である。

しかし最近ではK町も都市(生活)化の傾向が著しく、高い消費生活を支えるために兼業化が進み、出稼ぎや共働き家庭が増え、それらが低年齢少年の非行化に影響を与えるに至っている。この集団自動車盗もその一つである。

本件発覚の端緒……昭和五三年四月一日午前二時頃、同町の農業兼大工をしているT・Yが自宅前空地で自動

車のエンジン始動の音を聞き、窓から見たところ、庭先に駐車してあった管の自家用乗用車を何者かが道路上に移動し、そこでエンジンをかけようとしているので同人は息子(25歳)と二人で犯人を追跡した。

自動車の中に居た男二人は矢庭に自動車を飛び出しT山部落方向に逃走した。たまたま積雪があり、その上に残った足跡を辿って追跡し犯人をとり抑えたところ、同じ部落の中学二年生の少年であったので説諭してそれぞれの自宅まで送り届けた。T・Yは別に被害が発生したわけがなく、また犯人は同部落の子供でもあったので警察にも届け出ずそのままにしておいたところ、これを伝え聞いた近処の者が、最近同町で頻発している自動車盗難に関連があるのではないかと駐在巡査に電話通報して捜査が開始されたものである。

非行の概況……捜査の結果、明らかにされたところでは、犯人は全部で七名(うち一名のみ触法……十四歳未満)で何れもK中学校の二年生。非行は昭和五二年十一月十九日から昭和五三年四月一日に至る約六カ月にわたり、午後十一時頃から午前三時半頃までの間主としてK町内において、所有者自宅の敷地内の車庫または庭先に

(47) 山形県における少年非行

エンジンキーをさし込んだまま駐車してあった普通乗用自動車を始め軽乗用自動車、軽貨物自動車、普通貨物自動車、大型貨物自動車等合計三十六台(他に触法関連五台)を窃取し、これを無免許で運転し、同町からS市に至る国道を走行した末に路上または空地等に乗り棄てたものである。

被害自動車の中には側溝に落輪させ、あるいは雪の壁に突込んでウインド硝子やバックミラー等を破損させたものもあるが大半はそのまま乗り棄てられているのを発見され所有者の許に戻った。したがって、本件自動車盗難の噂は町内に流れ、駐在巡査の耳にも入ってはいたが、直接被害の届出をする者はおらず、また警察でも積極的に犯人の捜査に乗り出してはいなかった。

非行の動機……ことの起こりは触法少年のXが、医師をしている父の乗用車を無断で乗り廻して運転を覚え、同級生の少年A、B、C、D、E、Fらに他人の自動車を盗んで遊ぼうと誘ったことに端を発している。触法少年Xのみは発覚をおそれ途中で本件窃盗グループから自ら離脱したが残りの少年は、ますます興じて非行を重ね遂に発覚して検挙されるに至ったものである。何れも自

動車への関心が強く、中には小学五、六年生頃から父または母が運転する自動車に同乗して、見よう見まね、もしくは直接父母らの手ほどきを受けて自動車の操作技術を覚え、無断あるいは父母の黙認の下に自家用自動車の運転を経験している者もあった。多くは学校の休憩、自由時間に直接、または下校後自宅の電話で、「今日、クルマ乗りすっべ」などと連絡し合って、少年のうちの一人の自宅(少年の自室)に午後十一時過ぎ集合、二名ないし三名のグループで前記非行を反復して来たものである。少年らは協力して自動車をその所有者の車庫または庭先からすこし離れた道路上まで押して移動させ、所有者ら家人に聞こえないような場所でエンジンを始動して発進し、町内の路上あるいは遠く、S市や、A県境まで深夜の国道筋を疾走して楽しみ、夜明け前、自動車をもと駐めてあった場所の近くの道路上または空地に乗り棄て、時には側溝や道路淵に積み上げられた雪の中に突き込んだまま自動車を放置し、さらに他の自動車を盗んで乗りかえ、自宅近くまで来てこれを路上等に乗り棄てるなどして、各自自宅に帰り家族に気づかれないように就寝していた。彼らの行為は単に自動車運転に対する興味関心

からだけでなく、家庭や学校で満たし得なかった自己充足感の補償を他人の自動車を盗み、無免許で深夜これを持ち回すという反規範的行為に伴うスリルに求めていたものと思われる。

少年らの家庭環境……七名のうち前記触法少年だけが養父母関係で他の六名はすべて実父母で何れも健在である。父または母の職業では触法少年の養父は医師、他の少年の場合、五名は農家、そのうち専業農家は一名で、残り四名は兼業農家、しかも農外所得が農業所得を上まわる第二種兼業である。最後の一人は建設(基礎工事)請負業である。少年らの家庭は触法少年の家庭を除き何れも夫婦共働きであり、農家の場合は専業、兼業を問わず五名とも父親は冬期間、東京方面への出稼ぎ経験を持っている。経済面特に消費生活の程度は全員「中」もしくは「中の上」に相当し、七名のうち六名まで二台ないし三台の自動車を保有しており、保有していない一人も父親が稼働先の自動車を通勤のために家に持ち帰り、休日の日などにはマイカー同然に私用に使っている。住宅は全員、持家で部屋数、畳数ともに多く、少年は各自専用の自室をあてがわれている。

少年らの家庭で共通して言えることは、保護者らが共働き、出稼ぎ、多忙(疲労等)のため、少年に対し心ならずも放任あるいは甘やかしとなっている点である。たとえば少年らが自室を溜り場として飲酒、喫煙したり、本件非行の謀議をしたり、あるいは約半年間にもわたって夜半近く脱け出して本件を敢行し、盗んだ自動車を乗り回した挙句夜明け頃そっと帰宅就寝している事実にも気づかなかった。また、少年たちに自動車の無免許運転を教えたり、あるいはこれを容認したりして、他人の自動車を盗み出し、これを深夜、無免許で運転することへの罪責感ないし規範意識を育成陶冶せず、本件非行の素地を作った。もともと少年たちの保護者は、家族の物質的な要求を充足し都市的消費生活を賄うために懸命に働き心身ともに疲れ果て、夜も早く就寝しており、少年らが深夜、屋根伝いに二階の窓から出入りしているのを全く気づかなかつたからといってあなたがち無責任だとかばかりこれを非難することは無理かも知れない。

少年たちの学校環境……少年らが通学しているK町立K中学校は学年毎四学級編成で一学年に約一六〇名在籍している。少年らは全員二年生で、C組に四名、D組に

(49) 山形県における少年非行

三名それぞれ所属している。少年らの多くは剣道部に入っていてクラブ活動を通して仲よしになったものもいる。少年たちの学校での成績は一六二名中一〇番台が三名、残り四名は一〇番台と大きくわかれていたが、共通して本件非行の始まった二年二期から成績の下降が目立っている。一〇番台にある少年は進学校としてその地方では名の知られた県立S高校へ、一〇番台の少年はそれぞれ地もとの県立K高校へと全員進学を希望している。K中学校における昭和五三年度の進路状況を見ると、卒業生一六二名のうち、高校に進学した者が一二八名（八一パーセント）各種学校に進学した者が一八名（一一パーセント）就職一六名（九パーセント）となっており、山形県全体の高校進学率九三パーセントに比べK中学校の八〇パーセントはかなり低い。就職した一四名の中で地もとK町に残った者は僅か一名のみで、県都山形市を始め県内に七名、東京、神奈川など県外に六名それぞれ流出している。町当局の方針で牧畜酪農業等を振興して離農、離村、出稼ぎ等の防止に努めてはいるが中卒者等若年労働力は依然として町を離れて行っているようである。

このようなK中学校の進路状況の中で、本件少年たちは全員全日制高校への進学を希望しているということはある。それだけ恵まれた家庭の経済状態におかれていることを物語っている。進学校とされる県立S校は別として地もとの県立K高校は例年志願者の数がようやく定員数に達する程度の広い門で、大都市のように激しい受験進学競争のために中学校が灰色の重い空気に覆われるようなことはほとんどない。それだけに一般に生徒も父兄ものんびりしていて余り勉強に熱を入れないことも事実である。本件の少年や親たちがそうであった。

本件少年たちのほとんどは昭和五二年九月下旬、中学校体育館裏手で集団により喫煙したことが発覚、約三名の父兄と共に学校に呼び出されて注意を受けたことがある。その他には特に目立った問題行動は見かけられず学校側では少年たちの本件非行を警察からの連絡を受けるまでは全く関知しなかった。

少年たちにして見ても進学のための受験勉強をするでもなく、といってクラブ活動に専念するわけでもなく、無為無感動の日々を送っていて全力投入の対象を無意識的ながらも求めていたものと思われる。



少年らの性格……少年のうちFのみは意志が弱く、自己不確実で主体性に欠け、交友関係や周囲の状況に支配されやすい傾向にあった。小学校五年時、家の裏の木小屋で火遊びをし、火事を出したことがあり、また中学二年夏休みにも本件共犯者Eと深夜路上で喫煙しているのを部落の人に発見され、学校に通報され担任に注意を受けたこともある。Fの家は部落でも規模の大きい、本件グループの少年の家庭の中で唯一の専業農家である。父は毎年冬期間東京方面に出稼ぎに行き、家庭に居るときは農業仕事が多忙でFの教育は祖父母と母に委ねていた。母はFを甘やかして育てて来た。Fの心配な点は喫煙問題だけだと思ひ込み、Fに黙って鞆や机の中を点検したりもした。本件は警察の呼出して初めて知ったものであるが、専ら友達に誘われてやったものと母は信じ込んでいる。父は出稼ぎ不在中の出来事であり、日頃子供のことは祖父母や妻に委せてであると終始消極的態度をとっている。

その他の少年は共通して、家庭外では明るく素直で、中にはDのように積極的に行動し、教師、級友間にも信頼されている者も居るが、家庭内ではわがままで短気な

ところがあり、さ細なことでもすぐかっとし、父あるいは母に対して反抗的態度を示す場合もある。

彼らは共通して勉強嫌いである。進学率が高い点で定評のある県立S高校を志望し、成績も学年全体の中で常に十番台の位置を保っているEやDらでさえも余り勉強をせず、学校から帰宅すると自室で漫画や自動車関係の雑誌を読んだり、カセットテープで音楽を聞いたり、テレビを観て過ごしたり、Cのように本件共犯者らと飲酒喫煙したりしていた者もある。

全少年に通じて指摘できる点は将来への目的志向性の欠如、換言すれば自分をそれに向けて高めようとする同一化の対象が明確に持たれていない点である。現実的というよりも極めて状況依存的であり、未だ主体的な自我が確立されていない。たとえば彼らに将来何になりたいのかと質ねても明確な回答を期待することはできないであろう。父母や祖父母が農林業を困る厳しい経済環境の中で出稼ぎをし、兼業に就き、共働きをして懸命に家族の生活を支えている姿に接しながら少年たちには感謝の気持も、可能な方法でこれを手伝おうとの意欲も見かけられない。

(51) 山形県における少年非行

このような少年らの性格傾向をもたらしたものは家庭における保護者の放任あるいは甘やかしである。親が子供の主体性を無視して、その主観を押しつける支配的過保護が情緒障害や非社会的問題行動を多発させる原因となっていることは事実だが、本件少年の家庭、あるいは先に触れた山形県の非行少年の家庭に共通して多く見られる保護者の放任、無関心、甘やかしもまた少年の健全な自我の発達を阻害し歪曲するものであることを強調しておきたい。

主要参考文献

- [1] 山形県統計要覧
  - [2] 山形県警察本部刑事部防犯少年課「少年の非行と補導の実態」(昭和五二・五三年版)
  - [3] 山形県「青少年白書」
  - [4] 山形県企画調整部調整課「山形県における出稼ぎの現状と課題」(昭和五二・五三年版)
  - [5] 山形地域社会研究読書会「地域社会研究」第三号所輯 兼頭吉市「出稼ぎと少年問題」
  - [6] 兼頭吉市、檜山四郎編「統繁栄の落し子たち」
  - [7] 朝日新聞社編「民力」(一九七八年版)
- (前山形家庭裁判所・現横浜家庭裁判所次席調査官)